



## 第22回 木村奈保子の 音のまにまに

大人気を博した“アノ人”の芸は、音楽好きを感じさせるところに共感。そして、映画「島々清しゃ」の背景に流れる「気持ちいい」サウンドを感じ……昨年から今年にかけて、さまざまな芸の“まにまに”思ったこと。

### 音楽を愛する人々が生み出す作品

昨年の番組で、流行りのピコ太郎が、オーケストラで歌っていた。ピコ太郎は、お笑いの扱いだが、ミュージシャンとしてリズム感もいいし、何よりダンスが、誰かによって与えられた振り付けではなく、自分の体の動きそのものだから、いい。

短く、単純な曲を繰り返すだけのようだが、毎度わずかに、歌いまわし、タイミングのアレンジがあり、楽しい。聞かたびに、彼がものすごく音楽好きなのだと感じさせるところがいいのだ。実に大事に曲を扱っている。だから、海外でも受けたのだろう。

新年明けてから永眠した私の母は、生前にピコ太郎を見て、踊りが亡き父に似ていると言い、入院中、見舞客の前で「奈保子、ピコ太郎、踊ってみて」とむちゃぶりをした。しかし、日頃から好きで練習していた私は、難なくやっけてのける。

ちなみに会社で、ピコ太郎をやれ、と上司が部下に命じることをピコハラ、という——と誰かが書いていたが、そういう部下は器量が狭いのではないかな？

ただ芸を見せるときは、上手いと感心させるか、笑いを取るかしかない。両方できるのは、プロだからいずれも難しい。まじめくさった素人芸ほど、見る側・聞く側にとって辛いことはない。

いわゆるオトナの学芸会とならないよう、セミプロ、アマチュア演奏者は要注意。コミックバンドをあなどるべからずだ。

亡き父は、三味線の師範試験のとき、課題曲の前に、ラテン曲『ラ・クンパルシータ』を勝手に弾いてみせたのはご愛嬌。素人ながら、三味線の調律には人一倍うるさく、他人の分まで調整した。素人たちの共演は、耳の肥えた人にとっては、苦しい部分もある。

映画「島々清しゃ」のヒロインを見たとき、そんなことを思い出した。

アマチュア楽団のこなれていない演奏を聞くと、「気持ち悪い」と騒ぐ少女がいる。私も、自分が演奏の才能などないくせに、音楽、映画などのアートから、テレビ番組まで、完成度が低いものは実に「気持ち悪い」と感じてしまうから評論家の道へ進んだ。

映画は、少女がそんな過剰反応を乗り越えてフルートを吹くようになり、皆と混じり合うようになる物語。何より素晴らしいのは、少女のおじいちゃん役、金城実の沖縄民謡が映画の全編で使われていること。三線で歌う「みのる節」が「気持ちいい」。背景にこのサウンドがあるから、登場人物や物語が生きてくる。音楽好きと思われる映画スタッフの気持ちが、十分伝わるのである。

監督の新藤 風は、かつて私もインタビューしたことがある巨匠、新藤兼人の孫。この作品を支える「みのる節が」、風監督にとってのおじいちゃん、新藤兼人なのかもしれない。大御所へのリスペクトが感じられる音楽映画である。



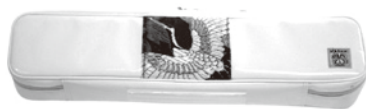
©2016「島々清しゃ」制作委員会



NAHOK INFORMATION [www.nahok.com](http://www.nahok.com)

Fabric from  
Germany,  
Made in Japan

WEB限定 H管フルートケースガード  
「Amadeus-KYOTO 2 /wf」 ホワイト / 西陣織



ドイツのハードな生地と厚みのあるオリジナル西陣織シルクを組み合わせたフルートケース。存在感たっぷりな和洋の極地をお楽しみください。

WEB限定 リュック式三味線&津軽三味線プロテクションセミハードケース「NITABOH3/wf」エメラルドグリーン with パチケース



耐衝撃素材のドイツ製完全防水生地、止水ファスナーという丈夫なつくりに加え、特殊温度&湿度調整機能付き。リュック式で軽く、雨にも強いパーフェクトケースです。